Peshawar-kai

ペシャワール会報

ペシャワール会事務局
〒810-0041 福岡市中央区大名
1-10-25 上村第2ビル603号室
TEL　092（731）2372
FAX　092（731）2373

No.113
2012年10月3日

〈URL〉http://www1a.biglobe.ne.jp/peshawar/　〈E-mail〉peshawar@kkh.biglobe.ne.jp

表紙絵　チャイハナにて／画・甲斐大策

目的と精神は変らず「生命」が主題です　中村　哲
医師としてスタート、十七年目、現在事務所長です　ジア・ウル・ラフマン
難民の暮らしから検査技師となって　モハマド・ヨセフ
◉ワーカーOB報告　ペシャワールでの臨床経験　小林　晃

ペシャワール会は、1983年9月、中村哲医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されました。彼の活動を支援するとともに、アジアの人々への理解を深めていきたいと願っています。

目的と精神は変らず「生命」が主題です

――時流に乗らない心ある人々の思いに支えられ

ＰＭＳ（平和医療団日本）総院長／ペシャワール会現地代表　中村 哲

みなさん、お元気でしょうか。

現地は再び、河川工事の季節が巡ってまいりました。昨年の今頃は、ベスード郡の堰（せき）や護岸工事が中心で、ずいぶんと急かされた気持ちでいました。おかげで、この一年、ベスード郡三千ヘクタールの安定灌漑を実現し、全郡の安定は近いと考えています（残されたタンギトゥクチ堰の灌漑面積は約六五〇ヘクタール。こちらは手が出せないのが現状ですが、他団体が実施しなければ、ＰＭＳがいずれ手がけることになります）。

さて今秋は特別な大攻勢です。ＰＭＳは現在、二つの地域を新たに潤（うるお）そうとしています。二〇一二年から五年をかけ、私たちの「緑の大地計画」は大詰めを迎えます。

1　シギ地域への送水

規模としてはカシコートが大きく、最大の努力が払われますが、シギ地方も劣らず重要なところです（5頁地図参照）。ＰＭＳガンベリ農場の開墾と同時に進められているのが、同地域への送水路です。これは事実上マルワリード用水路延長で、全長約二・二キロメートル、ガンベリ沙漠末端から二六〇メートルのサイフォンで自然洪水路をくぐらせ、同地域約一二〇〇ヘクタールの安定灌漑を実現しようとするものです（6頁表参照）。

既に今年四月以来、サイフォン両端から工事が進められてきましたが、集中豪雨の危険がない今冬中に開通、送水が始まります。これにて、マルワリード用水路の主要分水路の工事は終局を迎えます。

2　カシコート地域

河川工事で見ると、今秋の最大標的は、何といってもカシコートです。わが主力は間もなく、マルワリード用水路対岸の同地域に展開します。

同地の灌漑計画の経緯については、昨年一〇月から会報でも再々お知らせしたとおりです。これが成れば、マルワリード堰と

急激な雪解け（2年前の大洪水に匹敵）で既存用水路のベスード第二・タンギトゥクチ一帯は濁流に洗われた

連続した六五〇メートルの記録的な「石張り斜め堰」となり、両岸共に維持が非常に容易となります。

今秋に始まる本工事に先立って、既に今年二月の段階で準備工事が本格的に進められてきました。主幹用水路約二キロメートルが川沿いを走っていましたが、二年前の大洪水で破壊され、大きく湾曲した主要河道が村々を奥深くえぐっていたのです。六ケ村は昨年一〇月の段階でパキスタンへの難民化を決めていました。

洪水で流失したカシコート主幹水路地点の埋立て

PMSはペシャワール会の多大の協力を得て（二〇一一年一〇月）、緊急に河道変更工事を実施、難民化を食い止めました。作るべき用水路本幹が流失していて、急流の底に消えていたのです。これまた大規模な河道復旧工事となり、失地を回復、辛うじて秋の工事の備えが成りました。

この間、ISAF（国際治安維持軍）による女子学童への銃撃事件があり、重軽傷一六名を出しました。そこで、村民の懇請に従い、校舎建設をも同時に行うことになっています。「緑の大地計画」は、このカシコートを以て、仕上げの段階に入ったと言ってよいと思います。

ベスード、カマ、クズクナール三郡（カシコートを含む）の耕地は計一六五〇〇町歩、六五万人の農民の生活を支えることになります。これは、ほぼ福岡県南部の筑後平野の復活に等しく、人々が生きる基礎を提供することになります。

3　マルワリード用水路の「一斉浚渫（しゅんせつ）」

建設事業は確かに多大の費用、労力、技術や工夫を凝らし、目に見える結果を残します。しかし実は、維持保全態勢の確立がないと、完成とは言えません。目立ちませんが、建設以上にはるかに忍耐と努力が要ります。

二年前からの計画は、大約すると、二本柱からなっています。

①用水路流域農民の結束と協力

②熟練作業集団の確保と自活

前者は、二五・五キロメートル全線にわたり、受益村落が責任を以て特定区間の維持に協力する。先ずは全線の浚渫（しゅんせつ）を年二回、定例行事化する。こうして、流域農民

マルワリード用水路25.5㎞流域各村落の代表がマドラサ校庭に集結、公的機関筋も合流して決意表明（9月9日）

2012年度主要工事

ベスード郡	ベスード第一取水堰	水位変動の観察と植樹、必要なら改修
	タプー堰	
	ベスード護岸	しめきり堤の強化、河道変化の観察
カマ郡	カマ第一堰・用水路	水位変動の観察、必要なら改修
	カマ第二堰・用水路	
クズクナール郡	マルワリード用水路流域	ガンベリ沙漠開拓 ※
		湿地化防止の排水路造成
		シギ村落の安定灌漑（ガンベリ・サイフォン建設）
		堰強化工事（ジャリババ）
		流域村による浚渫の定例行事化
	カシコート	クナール河河道変更工事
		交通路敷設
		護岸工事（約2.0㎞）
		カシコート堰・用水路建設

※ ガンベリ沙漠開拓は、主に以下の仕事
① 果樹園（主にザクロ、柑橘類）の造成　② 砂防林の拡大と保全　③ 給排水路の拡大

共通の財産としての意識を定着させることです。

後者は、洪水による破壊、新たな給排水路の建設、堰や水門の補修等で工事が必要になった時、即時に着工ができるように待機させる。待機といっても給与を与えることができないので、ガンベリ沙漠開拓をしながら自活させ、普段は農耕に携わる。これが「自立定着村構想」で、いわば屯田兵村に近いものです。このための居住地と開墾地の確保、その合法性の獲得が間もなく実現の見通しとなります。

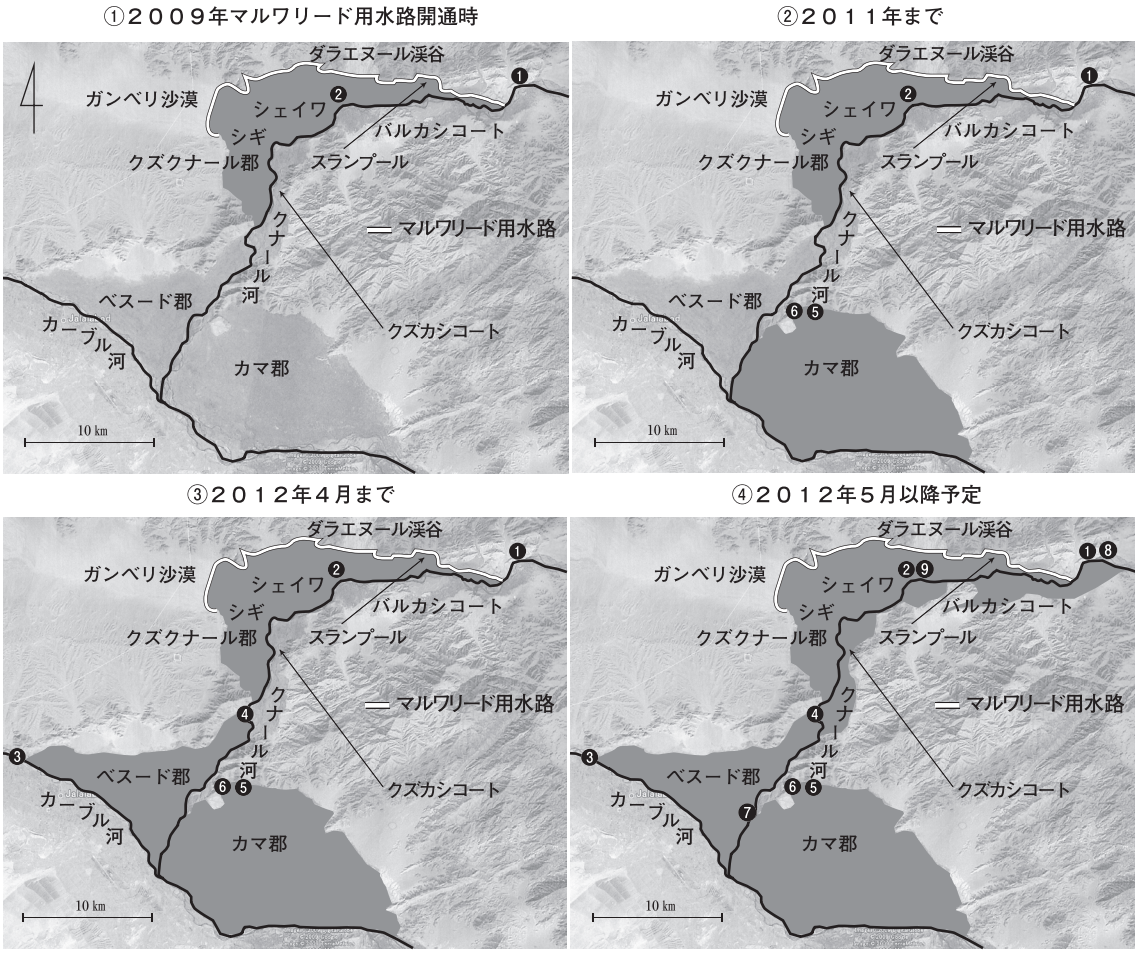
最近の大ニュースは、PMS副院長・ジア医師らの根気づよい折衝で、遂に流域全村自治会の協力を獲得、去る九月九日、用水路の「一斉浚渫」が行事として敢行されたことです。

マルワリード用水路は他と異なり、全くの新設でしたから、新しい移住者や数十年ぶりに戻った農民が多く、まとまりを欠くきらいがあったのです。これは長年の悲願であり、完工式に劣らず嬉しいものでした。

用水路14.4㎞地点のサイフォンの浚渫作業。このサイフォン建設に携わった作業員で用水路に対する愛着が強い

緑の大地計画―一〇年の節目

ペシャワール会が発足して二九年、現地活動は二八年を経過しました。ハンセン病診療に始まり、東部アフガンの山村医療、そして大きな転機が一二年前から始まる大旱魃（かんばつ）でした。その後アフガン空爆、引き続く内戦の激烈化の中で今日に至っています。



ＰＭＳによる取水堰の建設で潤される地域（耕地）

❶マルワリード堰（2004～10）❷シェイワ堰（2008）❸ベスードⅠ（2006～12）❹ベスードⅡ（2006～08）
❺カマⅠ（2008～11）❻カマⅡ（2009～11）❼ベスード・タブー堰（2010～11）❽カシコート堰（2012予定）❾シギ堰（2012予定）

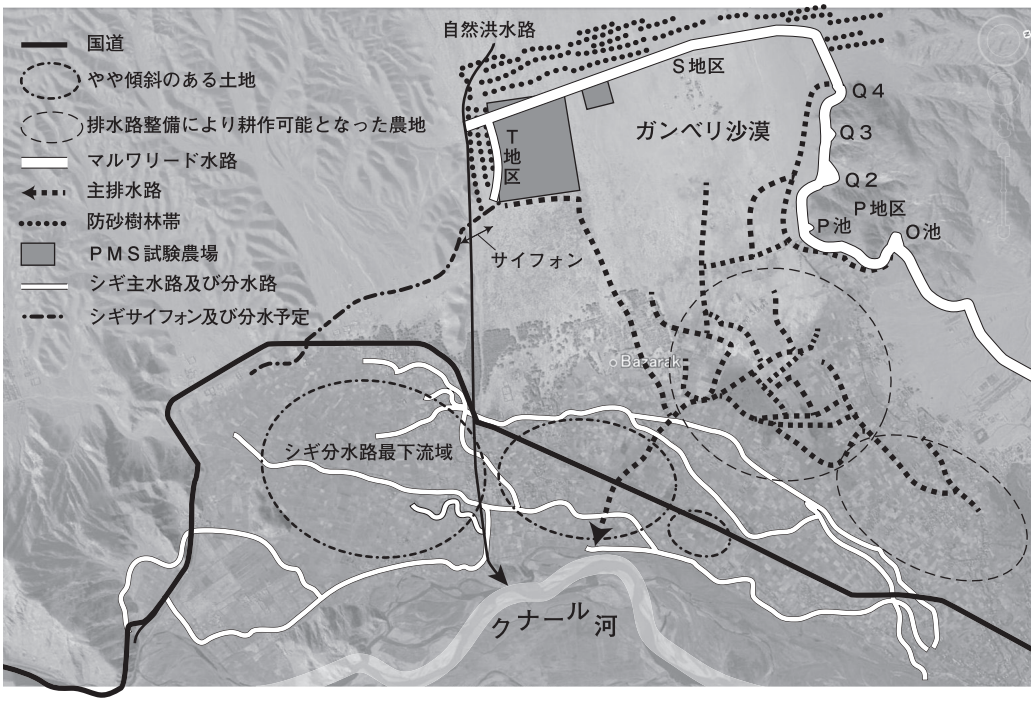
この間、ペシャワールにあったＰＭＳは、政治混乱と内戦の余波を受け、二〇〇八年に中心がジャララバードに移りました。しかし、日本側では「ペシャワール会」という名称は変えず、依然として強力な現地支援団体として働き続けています。

パキスタン領のペシャワールからアフガン領のジャララバードへ、医療中心から水利事業中心へ、ＰＭＳの現地活動は一見、大きな変身をしたようですが、目的と精神は変わりません。「生命」が主題です。

それでも、ほんの数年前まではカイバル峠を自由に越えて仕事が進んでいたことを振り返ると、不吉とも言える時の流れを思わずにはおれません。戦火は多くのものを奪いました。不寛容な殺伐さが増し、カネと武力が、人と人、人と自然の仲を裂いてきたような気がします。

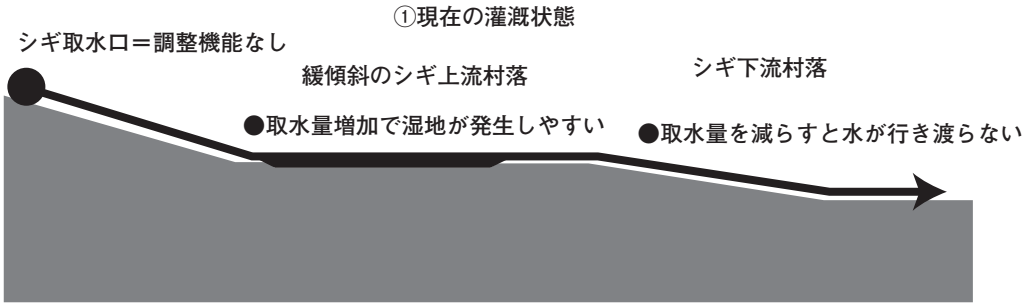
だからこそ、時流に乗らない心ある人々の思いに支えられ、心ない論評や妨害を超え、ＰＭＳの活動は脈々と続いています。どんな状況にあろうと、規模の大小を問わず、時と場所を問わず、行動を問わず、この世界を辛うじて支えているのは誰にもある人の温もりだと、感慨を深くします。

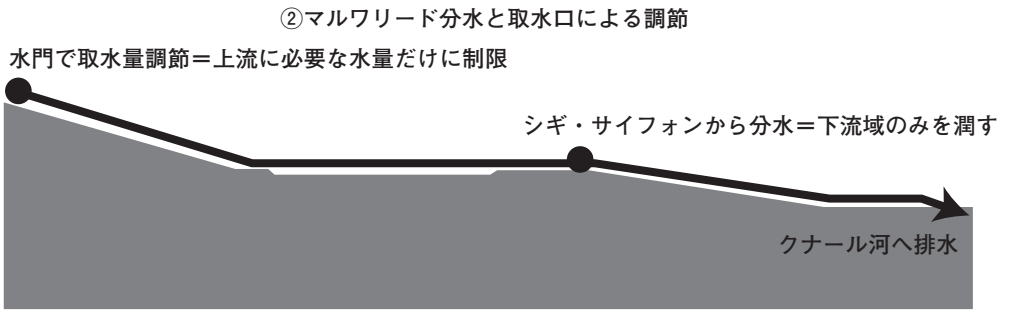
内戦は激しくなる一方で、政情は混乱の一途をたどっています。しかし、殆どの



※マルワリード用水路はＡ～Ｔゾーンに区分されています

ガンベリ沙漠とシギ地区





シギ灌漑方針・要図

人々の真情――戦と外国人の干渉は、もうたくさんだ。故郷で家族と三度の食事がとれさえすれば、それ以上のものは要らない――という、この無欲な願いが、誤りのない普遍的な人の営みでしょう。そして、これこそが、活動の基礎であり、活力の源泉であり、ゆるぎない平和につながるでしょう。

理念や政局の問題ではなかったのです。平和とは座して待つものでなく、体で戦いとることを学びました。時には軍閥や買弁政治家と対決し、時には自らの欲望＝過大な豊かさへの固執・我欲と対峙し、人の分限を超えた過信を排し、天意を尊んで恵みに感謝することなのです。

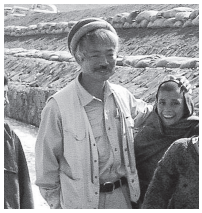
ガンベリ沙漠の平和ケ丘で職員たちと中村医師

最近、アフガン軍兵士や警官が外国兵を射殺する事件が更に増えています。その大半が非政治的なものです。一一年前、米軍の「報復爆撃」で、罪のないアフガン人が大量に死にました。あの頃、散乱した肉親の死体を無表情に集めていた子供たち、空腹を抱えて硝煙の中を逃げまどい、死んだ両親に取りすがって泣いていた子供たち、彼らが今、血気盛んな青年です。追いつめられた彼らの心情を思えば、非は何れにあるのか、断ずるのに躊躇します。「剣で立つ者は剣で倒される」。真理です。

他人事ではありません。私たちもまた、大きな転換点を生きています。人同士の関係だけでなく、人と自然の関係においても、アフガンで起きたことは、形を変えて世界中で起きます。

日本自身が苦しいにも拘わらず、大きなお支えをいただいたことに感謝し、「緑の大地計画」一〇年の節目に当たり、変わらぬご支援をお願い申し上げます。

平成二四年九月　記



中村　哲…九州大学医学部卒。専門＝神経内科（現地では内科・外科もこなす）。国内の病院勤務を経て、一九八四年パキスタン・パクトゥンクワ州（旧北西辺境州）の州都ペシャワールに赴任。以来二八年にわたりハンセン病コントロール計画を柱にした、貧困層の診療に携る。一九八六年からはアフガン難民のための事業を開始、アフガン北東山岳部に三つの診療所を設立。九八年には基地病院ＰＭＳをペシャワールに建設。また病院・診療所で患者を待つだけでなく、パキスタン北部山岳地帯の診療所を拠点に巡回診療も開始した。二〇〇〇年以降は、アフガニスタンを襲った大旱魃対策のための水源確保（井戸掘り・カレーズの復旧。作業地千六百ヶ所以上）事業を実施。さらに〇二年春からアフガン東部山村での長期的復興計画「緑の大地計画」を継続、〇三年三月からは灌漑水利計画に着手し、一〇年三月全長二五・五キロが開通した。年間診療数約四万五千人（二〇一一年度）。

医師としてスタート、十七年目、現在事務所長です

PMS副院長・ジャララバード事務所長・医師　ジア・ウル・ラフマン

私、ジア・ウル・ラフマンは、一九九六年六月からPMSジャパンで働いております。此度は、ジャララバード事務所長として、現状などを含めて私たちの活動を日本の皆様に報告致します。

PMSジャパンは日本の人々の寄付によって支えられており、一九八四年以来、アフガニスタン東部の貧困に悩む人々のために医療と灌漑部門で活動しています。

医療部門

PMSは、外来、検査室、ワクチンプログラム、薬局を持つダラエヌール地区で唯一の診療所である。外来患者は一日一五〇～二〇〇人で、主に女性と子供である。診療所は住民のために、二四時間門戸を開いている。

井戸プロジェクト

二〇〇〇年、深刻な旱魃（かんばつ）被害が主に東部で発生し、PMSは井戸プロジェクトを開始した。ソルフロッド、ロダト、アチン、ダラエヌール、ジャララバード市に一六〇〇本以上の井戸を掘削した。国境の町トルハムにも四本の井戸を掘っている。

また、給水ポンプと発電機を備えた灌漑用井戸も一四基掘削した。さらにダラエヌール郡で三八本のカレーズを再生した。これらは、ナンガラハル州の人々の大いなる助けとなった。

灌漑部門

PMS独自のマルワリード用水路建設は二〇〇三年に開始され、少しの作業を残して基本的作業は終了している。用水路はジャリババからガンベリ沙漠までの全長二五・五キロで、約三五〇〇ヘクタールの土地が灌漑された。

灌漑により難民帰還が進む中、PMSは地域共同体の要となるモスク（約七〇〇人収容）とそれに併設するマドラサ（伝統的教育機関）を建設した。教室は一四室有り、貧しい生徒のために寄宿舎も完備している。

定例浚渫作業のため集まった人々に、用水路保全をアピールするPMSジア医師（9月9日）

農業部門

用水路がガンベリ沙漠を貫通して農業プロジェクトをダラエヌールからガンベリ地区に移した。旱魃（かんばつ）は現在も刻々と進行しており、ダラエヌール渓谷では地下水位が下

がり数年のうちにPMSが井戸掘削を始める前と同じかそれよりひどい状態に陥るのではと考えられた。

ガンベリに州政府が試験農場として九〇〇ジェリブ（一八〇ヘクタール）の土地を供与してくれた。砂の除去作業を開始して、これまで約二〇〇ジェリブ（四〇ヘクタール）を開墾し、ドクター中村の指示で土質向上のため豆科植物を植え、たい肥や緑肥を施すように要請している。

用水路建設現場を巡回中のジア医師（右端）

シェイワ取水口

シェイワ地区の住民を援助するため、二〇〇七年一一月に取水口工事を開始し二〇〇八年三月に完了。住民約六万人がこの事業の恩恵を受けている。

カマ第一取水口

二〇〇八年七月に着工し二〇〇九年二月に完了。その後の洪水の状態を観察しながら改修を重ね、現在では安定した灌漑が可能となっている。

カマ第二取水口

二〇一〇年七月に工事を開始した。主な工事は完了し、非常に小規模な作業を残すだけとなった。五二村落が灌漑され、第一、第二合わせてカマ郡七千ヘクタールを潤し、ナンガラハル州住民に大きな恩恵をもたらした。

ベスード護岸

二〇一〇年夏の大洪水後に開始し、約三三〇〇家族、一五四〇ヘクタールがクナール河の洪水から守られた。

ベスード第一取水口

二〇一一年一〇月に開始。十万人以上が恩恵を受けた。以上すべてのプロジェクトはドクター中村の監督によって遂行され、私たち現地事務職員は全面的な後方支援に励んでいる。

カシコート取水口、護岸、用水路プロジェクト

カシコートは二七〇〇家族、合計三〇〇〇ヘクタールの土地がある。われわれは二〇一一年一〇月に具体的工事を開始したが、完成後は三つの地域（ベスード、カマ、カスクナール）をカバーすることになる。

今年４月７日竣工したベスード第一取水口　堰板方式取水門４基・２列、斜め堰から幅８ｍの主幹水路へ取水される

難民の暮らしから検査技師となって

PMS検査技師（元水源確保事業ダラエヌール地区責任者）　モハマド・ヨセフ

無職の難民として

私は、かつて難民としてパキスタンに住み、難民向けの英語教室に通っていました。そんなある日、私の兄がたまたま町の市場でサルフラーズ（現ダラエヌール診療所ナース）に出会いました。彼は兄に、私がどこでどうしているかと尋ねてくれました。兄は私の近況を話したそうです。サルフラーズは既にそのときJAMS（日本―アフガン医療サービス＝現PMS）で働いていましたが、私に事務所まで来るようにと兄に伝えたのです。そのころJAMSの事務所はパキスタンの州都ペシャワールのアブダラロードにありました。

私は言われたとおりにJAMSに出かけ、サルフラーズを訪ねました。すると彼は、当時責任者だったハッジ・ヤコブを紹介してくれました。

以前アフガニスタンにいたころ、ヤコブには一度だけ会ったことがありました。私がJAMSで働きたいとお願いしましたら、その後すぐJAMSに雇用され、仕事を始めることになったのです。そのときのJAMSの院長はシャワリ医師です。

検査技師の教育

勤め始めて、まず看護師養成コースを受けましたが、検査室に人手が必要となったので検査室の研修を受けるよう要請されました。それで、検査室の責任者だったヤヒヤといっしょに研修を始めました。ヤヒヤも他のチームメンバーも、私が出来るだけ早く覚えるように一生懸命サポートしてくれました。

初めに学んだのは、らい菌試料の取り方と、それを顕微鏡スライドに載せることで、次にはその読み取りでした。先輩のナジーブは親切に助けてくれ、検査室のいろんな手順を教えてくれました。こうして、私はいつでも検査室で働ける準備を整えたのです。

時にはミッション病院に出向き、らい菌検査をしていました。JAMSは、私をディール地区のテメルガール診療所に派遣すると決定しました。テメルガール診療所は、主にアフガニスタン・クナール州から避難してきたアフガン難民に医療を提供していました。

国境を越え、アフガン国内へ。右からグラムサキ、ヨセフ、中村医師、サルフラーズ、グンデル

それ以外にも、ワナ、ディール、テメルガール地域からの患者がいました。私の仕事は、らい菌を染色したうえで結果を出すことでした。

テメルガール郡の患者数は、パキスタン人も含めて、急激に増えていました。ハミドゥッラ医師が診療所の外来患者を担当していました。一つの診療所で働く期間は一ヶ月で、ひと月経てば別の診療所に移ります。こういう移動が毎月ありました。

かなりの数のハンセン病患者に、薬を届けることもしていました。

井戸掘削事業に従事中のヨセフ技師
（右から３人目、2002年11月）

内戦中、ダラエヌールへ

一九九一年、ドクター中村の指導のもと、JAMSはダラエヌール郡への医療チーム派遣を決定しました。チームは、ドクター中村、ハッジ・ヤコブ、サルフラーズ、私ヨセフ、グラムサキ、グンデルでした。

私たちはアフガニスタンに向けて旅立ちました。ルートは、パクトゥンクワ州（旧北西辺境州）、ナワガイ、シャングラ峠を越え、そして最後にハースクナール郡にいかだでクナール河を渡って入るというものでした。

私たちは、クナール～ジャララバード国道にあるツォウケイで一夜を明かしました。そして、朝早くに出発し旅を続けたのですが、ジハード（聖戦）グループ内の抗争のために道を阻まれました。幸いにも長老たちの努力によってこの問題は解決し、ヌールガルに到達。ダラエヌールのソレジ村へと旅は続きます。

ソレジでは、ハッジ・ファルークという人物と出会い、昼食を共にしました。その後さらにアムラ村、カライシャヒ村へと進みました。カライシャヒ村で地域の武装勢力であるハリス派の司令官ハーン・ララという人物にも会いました。ほとんどの人は、村を離れ難民化してしまっていました。

私たちはワイガル村まで旅を続け、そこで一泊しました。人々の抱えている問題を知るために、ドクター中村はワイガルの人々との話し合いを持ちました。ワイガルも朝早くに発ち、カムダック村へと向います。カムダック村でハッジ・アミル・ハーンのところに一泊したのち、シーマル村に行き、最終的にはラムンタク村まで行きました。

こうして数年をかけ一帯を調査したのち、ドクター中村はダラエヌール地区カライシャヒ村に診療所を建てることにしたのです。ダラエヌールの中心に位置し、しかも、ボンタ・カレーズは当時の渓谷の中心地だったからです。このころ、人々はパキスタンの難民キャンプからダラエヌールに戻りつつありました。

ダラエヌールの住民にとって一番こわいのはマラリアで、悪性マラリアの患者が圧倒的に多くいました。PMSダラエヌール診療所はこのマラリアを治療するにあたって決定的な役割を果たしたと思います。

ダラエピーチで車が強奪される

一九九二年、ダラエピーチ渓谷で事態が

ダラエヌール診療所検査室にて。検査中のヨセフ技師（2012年２月）

切迫していると考えられたので、調査がおこなわれました。そして、新しい診療所が作られ、私もそこで働きました。この地で働くのは大変でした。でも、すぐに人々と知り合いになることができました。ドクター中村に率いられたチームは、クナール州ダラエピーチに診療所を開設しました。

そのダラエピーチで大変な事件が起こりました。ＰＭＳのチームがクナール中央からシンザイ村にある診療所に行く途中、ニングラムというところで軍閥に脅され、車が奪われたのです。事件にあったのは、ハッジ・ヤコブ、イーサー医師、そして運転手のグラム・ナビとアブドル・マジードです。悪路で車が故障し夜にさしかかったときの出来事でした。一同は命からがらシンザイ村の診療所に到着し、私たちに事件を知らせました。現地の人々も私たちＪＡＭＳも、盗まれた車を探し出す為ジャララバードまで追跡しましたが、残念ながら車は発見できませんでした。後日談ですが、それから数年もたって、色も塗り替えられた車が探し当てられたのです。こんなことが起こるなんて！と、とても驚いたものです。

ダラエワマ診療所

一九九四年と一九九五年、ＪＡＭＳチームはハンセン病の調査をおこないました。チームはハミドゥッラ医師、アハマド・ヌール、シャワリ医師、シャフィ・アクバル看護師、ズベイド医師などがいました。調査地域は、クールダルダ、カンダラ、ニングラム、ダムクリニック、ウォータープール、カンダグルなどです。私もこの調査の一員としてらい菌の検査を行いました。

また、ヌーリスタン州で診療所が必要と

サファル・バハエル！（良い旅を）――10

ミドハトとアガの巡礼

甲斐大策

十一月のこの日、カーブル旧市街、砦下の墓地に近い自宅前で、六代目長老のババ・ミドハトを家族三十余名が囲んでいた。早朝の冷気に全員の息が白い。

四十年近く前、代替りを機にババは、石工や左官をまとめ石材加工業者になった。

大半のムスリムは墓標に拘泥しない。無形の魂を神に委ね切る。しかし、世俗の富や地位を墓所で顕示する者もいれば、徳望大きかった人物を末永く顕彰する碑や廟を切望する人々もいる。激動の世にもそれ等の需要はババ一族の手を経てきた。貯えもできた六三歳の今年、危脆な心臓への患憂があったが、ならば尚更この際とババは、老母と妻を伴うマッカ（メッカ）巡礼を決めたのだった。

巡礼ヴィザ取得から旅程や持参品調達まで、ババと同年配の旧友、三度の巡礼を経験している運転手ハジ・アガに頼る。アガは、友人への堅剛な情義を貫く、パクティア出身の典型的な山パシュトゥンである。

半世紀、ひたすら運転してきた。貧困と飢餓と病苦が覆う世界から家族の元へ戻っては、二度三度、名もなく逝った小さい亡骸を葬る。その土は、旱魃に硬く乾いていた。泥塊に妻の涙が染みては忽ち消えた。嗚咽に途切れる「神は偉大なり」の声を後にアガは、煉獄を彷徨う苦行僧のように再び大地を往った。

そんな日々にも、全経費を等分に負担する複数の客を伴い、アガは陸路の巡礼を果たしたのだった。貧しく、しかし愚直なまでに純篤な信仰に生きるアガの賢い巡礼だった。

アガが到着、ババ達三人のアラブ風白衣に頷く。

ポプラの樹で鵲がはばたき、黄金色の葉が散る。ババは一族全員と抱擁を交わし終え、雪を戴き始めたカーブル北方の峰々に眼を向けた。

思われ、そのための調査も行いました。私は、ハッジ・ヤコブ、アバド、アハマド・ヌール、グラムサキといっしょに参加しました。地域を調査したドクター中村は、ヌーリスタン州ワマ地区に診療所を設立しました。ワマで働いているとき、ヌーリスタン・カンティワ地域でコレラが流行したことがありました。JAMSの指示のもと、私たちは現地に一〇日間滞在し、多くの患者を治療しました。現地チームにはジア・ウル・ラフマン医師とサイード医師がいました。

第二試験農場を埋め尽くすザクロの苗6000本。冬に挿し木し(会報112号に写真あり)殆ど活着。約50センチに成長

飲料水源確保事業

二〇〇〇年には、PMSの飲料水源確保プロジェクトに参加しました。ダラエヌールの人たちは旱魃に苦しんでいました。ドクター中村は思いやりのある人で、「人々に清潔な水をもたらす」と決断したのです。私たちは、PMSのダラエヌール診療所内部でこのプロジェクトを始めました。そしてその後、診療所とは別に事務所を開設し作業を進めました。地下水位が低く、巨大な石に阻まれるなど、仕事は困難に満ちていました。当時ナンガラハル州では掘削用機材や他の物資が手に入らず、ペシャワールのPMS基地病院の助けを借りて問題を解決していきました。井戸掘削担当はソルフロッド郡が蓮岡さん、ダラエヌールが目黒さんでした。

私は、ダラエヌール地域で四五〇本の井戸の掘削、三八本以上のカレーズ再生に関わりました。このプロジェクトがおこなわれた地域は、アムラ、カライシャヒ、ショガリ、バルコート、ドゥドラク、ケシュマンドガラ、バンバコートです。このプロジェクトによって、ダラエヌールの人たちは現下の旱魃からも将来の悩みからも救われたのです。

二〇〇四年、家庭の事情のために私はPMSでの仕事を続けることができなくなりました。でもPMSの活動への関心は消えず、二〇一〇年にふたたび応募し、二〇一一年三月二二日に仕事を再開し、今もPMSで働いています。PMSで働くことができて幸せです。

▼郵便払込票の記入は分かりやすく▼

＊ご寄付をお送り下さった郵便払い込み用紙は、郵便局からコピーが届きますので、文字がにじんだり、かすれて判読しづらい場合がございます。楷書で分かりやすくご記入いただければ大変助かります。

▼未使用の切手、ハガキを！▼

＊会報の発送等の通信費に、年間数百万円かかっております。未使用の切手・書き損じのハガキ等お送りいただければ幸いです。(使用済みハガキ・切手は受け付けておりませんのでご理解下さい)

＊一部地域の方々への会報は「料金別納郵便」でお送りしておりますが、その際も料金の代わりとして未使用切手で支払っております。

●ワーカーOB報告

ペシャワールでの臨床経験

元PMS病院医師
小林　晃

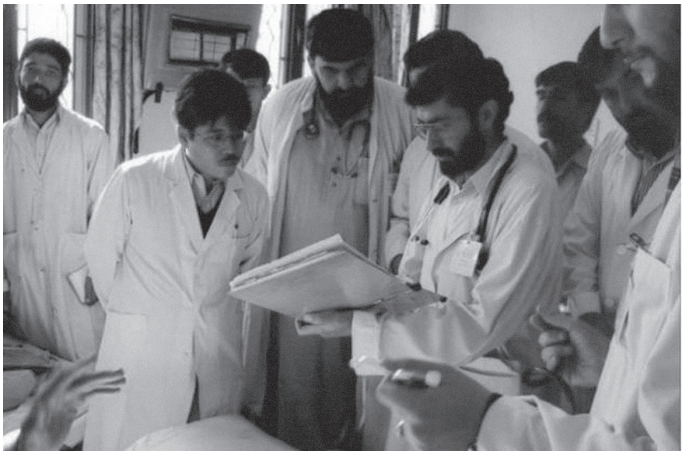
原因不明の発熱患者

ペシャワール会の皆様お元気ですか。私は一九九七年より二〇〇一年まで、現地で医師として、主にハンセン病患者およびアフガン難民の診療に携わっていました。今回、ワーカーOBとして会報に書かせて頂く機会を得ましたので、当時のペシャワールでの臨床経験について述べたいと思います。

私が当時勤務していたペシャワールのPMS基地病院には、多くの持続する発熱を訴える患者が来院されました。肺炎や肺結核などの患者は、咳、痰などの臨床症状等から容易に診断できました。一方、発熱以外に特徴的な症状を訴えない患者も多く、そのような時は診断に苦慮しました。現地ではこのような原因不明の発熱患者としてまず考えるのは、マラリア、腸チフス及び肺結核以外の結核疾患（肺外結核）です。マラリアは血液の塗抹検査でマラリア原虫を認めると診断できますが、技術的な問題などで、原虫を認めなくてもマラリアは完全には否定できません。マラリアおよび腸チフスは、特に病初期では高熱を発するのみで診断に苦慮します。私が現地に赴任した当初、これらの原因不明の発熱患者に対しては、いずれも高価なマラリアと腸チフスの薬を同時に投与していました。それでも解熱しない場合は、肺外結核を疑い抗結核薬を投与していました。

腹部エコーによる診断

そこで私は腹部エコーが腸チフスの診断に役立たないかと考えました。腸チフスは血液培養で診断できますが、この検査は時間と費用がかかり途上国ではあまり実用的ではありません。腸チフスは、腸チフス菌が経口感染後小腸のリンパ組織に達し、腸間膜リンパ節をおかして血行性に各臓器に転移巣を作ると考えられています。そこで、その当時、シャキール医師を中心としたスタッフに腹部エコーの指導をし、症例を重ねることにより、腸チフス患者では腸間膜リンパ節が腫大することが分かりました。我々は腹部エコーで腸間膜リンパ節が腫大している患者を腸チフスと考えて抗生物質を投与し、それ以外の患者に対して、肺外結核やその他の発熱疾患を疑う所見のない場合にはマラリアと考えて治療を行うと、多くの患者が軽快することが分かりました。これらの腹部エコーを使った一連の診断、治療の考え方はPMS基地病院で定着し、薬剤費の節約にも貢献しました。これらは、我々がまとめたペシャワールでの臨床経験を基にした腸チフスに関する論



PMS基地病院に勤務当時。回診中の小林医師（左から２人目）

文（Southeast Asian J Trop Med Public Health 2012;43:423-36）に詳細が記載されていますので、興味のある方は参考にしてください。

腹部エコーは、腸チフス以外に肺外結核（結核性腹膜炎、腸結核、腎結核等）等の発熱疾患の診断にも現地では役立ちました。また比較的安価で発展途上国でも手に入れやすく、持ち運び可能な機種もあり、発電機があれば使用可能です。他の途上国でも腹部エコーが、原因不明の発熱患者の診断および治療の一助になれば幸いと考えます。

治安回復と診療再開を祈る

私がペシャワールを離れて一〇年以上になりました。会報から知る現地の様子では、二〇〇一年の同時多発テロ、その後の米軍の介入以降、治安が最悪になっています。PMS基地病院も残念ながら治安の悪化等により撤退を余儀なくされました。今から考えると、ペシャワールおよびアフガニスタンの山岳地帯であのような高度な医療を実践できたのは、ほとんど奇跡に近いといえるかもしれません。前回の会報によりますと、ハンセン病を診療できる医療施設はアフガン国内では皆無に等しく、現在唯一残っているダラエヌール診療所も、この政情下でハンセン病診療に本格的に取り組むことができないようです。現在中村先生をはじめ多くのスタッフの皆様が、生命の危険を冒してまでも用水路の建設に奮闘しておられ、多くの人々がその恩恵にあずかっています。アフガニスタン、パキスタンに再び平和が訪れるのはまだまだ先のように思われますが、せめて以前のように治安が回復し、ペシャワール会の活動が安全に行われ、本格的なハンセン病患者の診療も再開されることを祈るばかりです。

2013年カレンダー

「華・獣・人」

画・甲斐大策

予約開始しました

A2判変型（画・7点）
定価：1500円（税、送料込み）

今年も恒例のカレンダーを制作しました。同封のハガキでご予約いただけますので、お早めにご注文ください（ご友人・知人の方々へのプレゼントも承ります）。

▼寄附をしてくださる皆さまへ▼

＊当会は法人格を持たない「任意団体」です。お送り下さったご寄付については税金控除の対象となりません。予めご了承頂きますよう、お願いいたします。

▼郵送方法の変更について▼

＊一部地域の方々へは発送代行業者を通して別納郵送しております。差出人欄に代行業者名が記載されますのでご了承下さい。

●事務局便り

＊今回の中村医師の報告で嬉しかったのは、マルワリード用水路全線の受益村落が責任を持って用水路の維持に協力し、年二回の浚渫作業を定例化するということである。そして九月九日には全村自治会によって「一斉浚渫」が行われたのである。これは用水路を、将来にわたって保全・維持してゆくための基礎ができたということである。まさに画期的なことである。

二〇〇三年の三月、用水路建設に着工してすでに一〇年になろうとしている。当時専門家に助言を求めると、「あなた方は、水利権や塩害の問題についてはどう考えているのか」と問い返された。専門家によると、そういう問題の事前調査を行った上でないと、工事はやるべきではないということだった。経緯は省くが、現在では、現地事業は日本の農業土木の専門家から高い評価を得ている。蛇籠工や柳枝工に斜め堰、石出し水制という伝統工法を駆使した事業を、「農業土木の原点」であると言う専門家もある。蛇籠工や柳枝工という伝統工法は、いわば骨董的な工法であるが、環境問題や生物多様性が前面に出てくる時代では、ある意味最前線の工法とも見なされるようになっている。今回、製作したDVD「アフガニスタン　干ばつの大地に用水路を拓く　治水技術の七年」（企画・ペシャワール会／製作・日本電波ニュース社／朗読・菅原文太／七三分　税込・送料込　二六二五円）には、技術的なことをベースに用水路事業の七年が詳細簡明に記録されているので、ぜひご覧頂きたい。また会場の大小に関わらず、上映会についても企画頂けると幸いです。

この一〇年、現地の治安悪化に加え、旱魃の中での洪水、集中豪雨、砂嵐と自然災害に襲われながらも現地事業は、着実に進められてきた。日本側もリーマンショック以降の不況感のなかで三・一一東日本大震災が起こり、財政的な危機感の中で、広報・募金活動が行われ、なんとか安定した支援体制を確保することができた。会員の皆さんの揺るがぬ支持に深く感謝いたします。

＊この夏八月二六日で、伊藤和也君を亡くしてまる四年になる。蝉時雨の中、墓前にその後の現地事業について報告してきた。ご両親も現地事業に深く関心を持たれており、建設予定の女子学童校舎への「伊藤和也アフガン菜の花基金」からの寄付を申し出られた。

ペ村から

毎週水曜日の夜、仕事帰りに事務局に通い始めてから二〇年経ちました。現地の活動も医療から現地の状況によって変わり、今は用水路建設が主になっていますが、人々の命を守ることに変わりありません。昨年から写真展の担当になり一年過ぎました。会場での写真の展示と説明等をさせて頂いています。会場に足を運び、医療の最初の一枚から最後まで熱心に見て下さいました皆様と主催者の方々に感謝致します。（F）

医者、用水路を拓く
アフガンの大地から世界の虚構に挑む
中村哲　用水路建設事業の7年をつづった感動の記録　【3刷】1890円

辺境で診る辺境から見る
【3刷】1890円

医者 井戸を掘る　【10刷】1890円

医は国境を越えて　【6刷】2100円

ダラエ・ヌールへの道
【重版・5刷】2100円

ペシャワールにて　【8刷】1890円

アフガン 農業支援奮闘記　高橋修・編著
農業計画6年余の失敗と成功を記した貴重な記録【新刊】2500円

聖愚者の物語　甲斐大策

1890円

石風社　福岡市中央区渡辺通2-3-24　電話092(714)4838

人は愛するに足り、真心は信ずるに足る
アフガンとの約束
中村哲／澤地久枝（聞き手）
1995円

岩波書店　東京都千代田区一ツ橋2-5-5　電話03(5210)4000

価格はすべて税込価格（税5%）です

会　則

①本会の名称をペシャワール会とする。

②本会は、中村哲医師のパキスタン北西辺境州ならびにアフガニスタンでの医療活動などを支援し、必要な情宣・募金活動とともにワーカーの派遣を行うことを目的とする。

③本会は、思想・信条にとらわれず、「支え合い」の精神で一致して会を運営する。

④会員は年額三、〇〇〇円、学生会員一、〇〇〇円、維持会員一〇、〇〇〇円の年会費を納入する。

⑤会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。

⑥本会は会報を発行し、会報を通じて活動を報告する。

⑦本会は若干名の理事、監事を選任し、会の運営を行う。

⑧毎年一回総会を開き、事業および会計について報告する。

⑨本会の事務局をFARAHOUSE（〒八一〇―〇〇四一　福岡市中央区大名一丁目一〇―二五　上村第二ビル六〇三号 TEL〇九二―七三一―二三七二）内におく。

発行所●ペシャワール会　〒810-0041　福岡市中央区大名１丁目１０―２５　上村第２ビル６０３
電話 092（731）2372　FAX　092（731）2373　郵便振替　01790-7-6559
発行日　2012年10月3日　No.113　会長　後藤哲也　現地代表　中村哲　名誉会長　高松勇雄